まちづくり
ネットワーキングえひめ

舞たうん

VOL.87
2006.1

新春特別インタビュー
観光カリスマに聞く

特　集
「地域再生」～交流に新たな活路を見出す～

アングル　島が丸ごと博物館（ミュージアム）　持続可能な里海づくり
NPO法人黒潮実感センター　センター長理事／神田　優 ……1

新春特別インタビュー
観光カリスマに聞く
「ナニ」と「コト」があったら観光はもっともっと面白い　伊予市／若松　進一 ……2
地域づくりは結局、人に始まり人に終わるだけの話ですよ　新居浜市／森賀　盾雄 ……4
人とのネットワークが生きがいに繋がってるの　内子町／野田　文子 ……6
観光でもまちづくりでも最後はもう人づくりでしょうね　松野町／岡田　春喜 ……8

特集　**『地域再生』～交流に新たな活路を見出す～**
「地元学」から「石畳むら並み博物館」へ　内子町／安川　徹 ……10
村の一軒家に人を呼ぶ　久万高原町／高岡　啓一 ……12
農林業体感民泊「天辺」を介して　久万高原町／松本　宣子 ……14
交流・協働・特区で地域が元気に！！　新居浜市／矢野　鐵二 ……16

論談ーまちづくりー
理科系の観光地域づくり　㈳日本観光協会調査企画部長／古賀　学 ……18

キラリ光るまち
過疎に光をあてたワーキングホリデー　宮崎県児湯郡西米良村／黒木　定藏 ……20

若者とまちづくり
第7回　大学生が考えた「住みたいまちの条件」と「訪ねたいまちの条件」　伊予市／若松　進一 ……22

トークナウ
若者と地域を結びたい　松山市／横山　史 ……24
愛のあふれる『愛U』を目指して　松山市／樽本真由美 ……25

MY TOWNうぉっちんぐ　歩キ目デス＆足テラス
「中国の屋根付橋『風雨橋』の不思議」　伊予市／岡崎　直司 ……26

研究員レポート
ハイジの国から学ぶ理念　研究員／兵頭　利樹 ……28

Informationセンターからのお知らせ ……29

特集

「地域再生」
～交流に新たな活路を見出す～

本来、地域の自然や、そこで育まれた文化や産業は、みな独自性を持っていた。しかし、押し寄せるグローバル化の波はその独自性を飲み込み、多くの地域が、固有の資源や文化、産業を衰退させていった。◆そして今、地方には少子高齢化と過疎化の波が迫り、コミュニティを維持することが難しくなっている。◆今回の特集では、地元のアイデンティティを見つけることの大切さに気づき、コミュニティ存続への道を「交流」に求めて走り始めた人物や地域を取り上げた。◆交流は地域に外からの刺激や評価をもたらし、自分の地域に対する誇りと自信を深めてくれる。◆モノから心へ、豊かさの本質が求められる昨今、取材の旅で出会った人たちと、その地域が発する熱い息吹で一足早い雪解けをお届けしたい。

（編集子　脇田）

表紙の言葉

久万農業公園アグリピア

久万農業公園アグリピアに到着。借地農園にはログハウスも並び、各自の思いの野菜が育っている。各家庭の微笑が浮かびます。

ビニールハウスが並ぶ中の一つに、どんぐりトマト栽培。トマトがプラプラ十数個連なって枝から垂れ下がっています。

完熟の真赤なトマトは、つるんと口の中に滑り込む大きさ。口の中で実に甘いと叫ぶ声。高原野菜は天候一つで出来が左右される。

柳原あや子

島が丸ごと博物館（ミュージアム）　持続可能な里海づくり

NPO法人黒潮実感センター
センター長理事　神田　優

■サンゴに囲まれた魚の楽園　柏島

柏島は、高知県の西南端にある周囲三・九㎞、人口五三〇人ほどの小さな島です。この島の魅力は、山の上からでも海底の魚が透けて見えるほど澄んだ海と、たくさんの生き物たちです。

柏島の海は南からの澄んだ暖かい黒潮と、瀬戸内海から豊後水道を南下してくる栄養豊富な水とが混じり合うことで、多種多様な海洋生物の宝庫となっています。柏島周辺海域にはテーブルサンゴや柔らかいソフトコーラルと呼ばれるサンゴの仲間が所狭しと広がり、そこには日本国内で初めて発見された「日本初記録種」や、新種の可能性があるモノなど一〇〇種ほどを含む、約一〇〇〇種の魚が生息しています。この数は小笠原や沖縄をしのぎ日本一です。

温帯と亜熱帯が共存する柏島の海

柏島は昔から高知県有数の水揚げ高を誇る漁業で栄えてきた島ですが、昨今では海の美しさと魚の多さでスキューバ・ダイビング業や磯釣り渡船業、旅館民宿業なども発展し、年間三万人を超える観光客が訪れています。

■島が丸ごと博物館

NPO法人黒潮実感センターは、柏島の豊かな自然環境だけでなく、そこに住む人たちの暮らしもまとめて、「島が丸ごと博物館」と捉え、持続可能な里海づくりを目指した活動を行っています。

「人が海からの豊かな恵みを享受するだけでなく、人も海を耕し、守る。」これが私たちが提唱する「里海」の考え方です。

持続可能な「里海」の実現に向けてセンターでは大きく三つの取り組みを行っています。

1. 自然を実感する取り組み
2. 自然を活かした暮らし作りのお手伝い
3. 自然と暮らしを守る取り組み

自然を実感する取り組みでは、柏島の海で調査研究活動を行い、その成果を地元住民や柏島を訪れる観光客に還元するための里海セミナーを行っています。さらに次代を担う子どもたち向けに海の環境学習や体験実感学習を、成人向けにはエコツアーを開催し、柏島の海のすばらしさを実感して貰う取り組みを行っています。しかし豊かな自然環境があっても「環境だけでは飯が食えない」と言われる中で、豊かな自然環境を活用した暮らし作りのお手伝いとして、島おこしの会の方々とともに物産市「里海市」を開催したり、豊かな漁場作りのお手伝いとして、アオリイカの増殖産卵床設置事業などを地元漁業者やダイバー、子どもたちと一緒に行っています。豊かな自然がありそれを利用して経済が活性化していっても、一方的に海からの恵みを搾取するだけでは良い環境を残すことができません。そこで大事なのは自然と暮らしを守ることです。この活動では地道な自然環境の変化を把握する調査を行ったり、サンゴや藻場の保全活動、さらには大勢訪れる観光客の受け入れ態勢を整えつつ、島独自のローカルルールとしての「柏島里海憲章」を策定し、島の環境と人々の暮らしを守っていこうという取り組みをしています。これまで全国各地で失敗してきた消費型の観光地を目指すのではなく、持続可能な環境立島を目指すべく地域の人たちとともに活動しています。

海の中の森づくりでヒノキの産卵床に集まるアオリイカ

「ナニ」と「コト」があったら観光はもっともっと面白い

夕日をまちの資源として活用し、オンリーワンのまちづくりに取り組んできた若松進一氏。夕日によるまちづくりの成功で双海には、現在年間五十五万人もの観光客が訪れる。若松氏が考える観光の形、また今後の展開を聞いた。

―ここ数年の観光を取り巻く状況をどう捉えていますか。

若松　観光が変わってきたことは事実ですね。今までの「見る」から「体験する」とかいう感じにずいぶん変わってきてると思うんです。ですから観光地の概念というものが、風光明媚なものや、あるいはテーマパークのような大きな投資をしたりしたものから、自然とか人間の暮らしみたいな、ホスピタリティーというのかな、そんなところに観光が変わってきたんじゃないかと思うんです。

―観光客のニーズが変わってきたということですね。

若松　その背景にあるのは、情報化です。インターネットの普及によって情報の捉え方がすごく変わってきたんですよ。例えば、自分が家庭の中でインターネットで行きたい場所を検索してみると、ズラズラズラと出てくる。その中で自分の好みにあったものが、またズラズラと出てくる。その中で選んでいくというやり方でしょ。そうなってくると、こちらの情報の出し方っていうんですかね、観光には、来てもらう側とそれから来る側という二方向性があるんだけど、そこを繋げていかないとうまくいかない。ですからいい情報を、どのように商品化して、インターネットで出していくか。だからこの五年ぐらいで随分その観光を巡る背景は変わってきた、ということですね。人の意識もさることながら、

真似しない、真似できないアイデアで地域力を作り上げるカリスマ

若松　進一

わかまつ　しんいち
1944年双海町（現伊予市）生まれ。愛媛県立宇和島水産高等学校漁業科卒業後、69年より双海町教育委員会で社会教育を担当。地域振興課長を経て05年4月まで教育長を歴任。現在、地元の下灘地区に遊び心と学び心を実践する場として「人間牧場」を建設中。
03年観光カリスマ（第3回）に選ばれる。

それを取り巻く情報産業としての価値っていうのがだいぶん変わってきたっていうことでしょうね。ただ来てもらう側が、それについて行ってないっていうのが実情じゃないですか。

―情報がこれからの観光のキーワードのひとつということですが、観光を提供する側の意識の変化はどうですか。

人間牧場に建設中の「水平線の家」。牧草に見立てた海や水平線を望み、新たな「コト」おこしを構想する若松氏（左）

若松　やっぱり人生とは何か、豊かさとは何かというものをこちらが持ってないと人は来ない。一番僕が思うのはそこなんです。結局は、受け手たるこちらが、どういう想いを持っているか。言い換えればね、楽しくもないところに来て楽しいわけがないわけですから。その人がいきいきと輝いて生きることをみせれるようなことがまず前提になってくるんです。あとはそれが経済というシステムに組み込まれるような知恵だね。だから一人の人間がどう生きるのかという生き方と、それを金にする知恵と、それをどういう情報で発信したり受信するのかという。結局は、これがセットにならないと、情報だけ出したところで、来てみたけどつまらなかった、ということになる。

―今後の活動や展望ついて教えてください。

若松　田舎は、このままでは人は来ないです。なんで来ないのかって言ったら、みんな多分「道が狭いけん、来ない」って言う。でも、大事なことは狭い道の向こうに「ナニ」があるかっていうことですね。その「ナニ」を作っていかないといけないですよ。むしろ、道の狭さの中でここに到達した時の驚きっていったら、逆に大きいから。

そしてそこにもうひとつ「コト」だよね。例えばここに人間牧場が出来た。でも出来ただけだったら、何もないけど、ここに「コト」という仕組みを作っていくというかな。こだわりというかな。夢というかな。そんなものがあったらいくらでも人は来ますよ。それで今はそれに大なり小なり金を払うという行為はもう十分にみなさんが認識してるから。

だから「ナニ」と「コト」っていうものがあったら、観光は、もっともっと面白い。だってこのロケーションが金になるんだから。

だからこの価値に気づいて価値を後ろ盾にしながら、「ナニ」かをつくり、そこに「コト」をおこしていくという作業。しかもそれは私という人間しか出来ないもの、誰にでも出来るんだったら、たぶん誰でもやりますよ。

この前来た人が驚くのは、あそこに例えばカマキリがいるよね。普通はこれ、田舎の人は虫です。あそこに鳥が止まるだろ。これでも鳥ですよ。でもバードウォッチングとか、カマキリをじかに見る驚きっていうかな、感動。だからすべてが空気や風の流れも、雲の行く手も、時には星だって……水の音だって、観光資源、観光資源ですよ。

地域づくりは結局、人に始まり人に終わるだけの話ですよ

新居浜市の形成史や産業遺産に着目し、工業都市が知的博物館都市へと変わる礎を築いた森賀氏。森賀氏が考える観光とまちづくり、また今後の展開を聞いた。

―新居浜市は、現在「産業遺産モデル都市」として認識されていますが「産業遺産」に着目したきっかけは何ですか。

森賀　実際、観光カリスマって選んでいただきましたが、観光という意味合いを強くもってたわけじゃないです。むしろ、地域づくりをやろうということです。産業遺産を使った新しい産業起し・地域づくりをね。また新産業を起こしていく上に、技術の歴史や、そういうものを雄弁に語らせて、新居浜でもそんなに過去で頑張ったんだから、さらに今の時代も頑張る意欲を継続しようとか、そういう意味合いで使おうというようなことが元からの発想ですよね。

―地域づくりが、観光の振興に繋がったということですか。

森賀　そうですね。それで今、我々が考えてるのは、観光にまちづくりを取り込むこと。大手エージェント中心のツアーの時代を終わらせようということです。大手エージェントが行ってきた観光というのは、送客型観光、すなわち送り込み型の観光です。これを受地型観光に変えようというのが、我々の発想です。なぜかと言えば、観光の内容は非常に多様化しています。これだけ多様な仕組みを、誰がサポートするかということです。それを大手エージェントが全部ノウハウを入れてセット出来ますか？それなら、また彼らの下に支配をされてですね、結局は東京に金が行ってしまう。

　我々が言っているのは、この観光の金の流れを変えようということなんです。金を出来る限り地域内循環させようと。

地域資源を活かしたオープン博物館
都市づくりのカリスマ

森賀　盾雄

もりが　たてお
1948年新居浜市生まれ。岡山大学法文学部経済学科卒業後、72年に新居浜市役所へ入庁。2000年「近代化産業遺産全国フォーラム」を新居浜市で開催し、事務局長を務める。現在、産業遺産を核に「世界知産都市」「ジオ・ミュージアム都市」を目指す。
03年観光カリスマ（第2回）に選ばれる。

今も、地域内に全然、金が回ってないかといえば、そうではない。けれど、宿泊費や飲食費の三割位は地域外の送客側に流れています。この三割の内、一割をビジターに、一割を地域内の旅館等に還元し、あとの一割を地域内のマネージメント会社にもたらせばよいことなのですね。そういうことで受地主導型の集客などを行う地域内のマネージメント会社、株式会社まち協ネットワークを関係者の方々で市内に立ち上げていただきました。ビジターの希望にきめ細かく対応し、一括受注して地域の集客産業を儲けさせる会社、いわばプラットホーム会社なんですね。

そして、現在求められているような、複雑多様化したプランは、地域の人達が案内するんです。地域の人たちが案内することによって、自分も地域をよく理解するし、外から来た人との精神的落差もよく分かる。それによって自分のまちの存在というものを、教えられて、自分のまちのまちづくりを考える。そこに議論が起こり、前進しなければならない課題が見えてくる。課題はビジターが教えてくれる。すなわち独りよがりの地域づくりから脱することができる。

全国どこの田舎に行ってもあるようなよもぎ団子作っても、それは、やっぱり独りよがりになってしまう。みんなそこで停まってる。そこから脱皮しないんです。そして脱皮をさせるための仕掛けとして、観光とまちづくりが繋がるところがミソなんです。

自分の地域は自分が案内する。その地域で、関わっている人の姿を見て、訪れた人は初めて、五感で納得するんです。感動もあるでしょ。講習受けて流暢に「別子銅山はこうでございまして～」と言われるよりも、別子銅山に昔働いとった人が、「昔、わしはこうだったんじゃ」って言う方が、説明は下手でも、いいかもわからん。

それが地域づくりにとってどうしても必要です。だからまちづくりが観光と引っ付いてきている。引っ付かざるを得ない状況になってきている。

―今後の活動や展望ついて教えてください。

森賀　結局、住めば都と思えば都なんですよ。だって住友グループが寄付してくれたあんな立派な図書館もあるし、広瀬邸もあるし、まだ何が欲しいのかと。そんなことよりも、そこの人の生き様がどうかっていうことが一番大事なんでね。地域づくりは結局、人に始まり人に終わるだけの話ですよ。なんの為に生きてるのかっていう話だけですよ。もっと温かいものっていうのは、そういう建物で、もらえるわけじゃない。

今からは、ソフトを一生懸命市民主導でコラボレートして、それを前進させるためにどうしてもハードなものがいるんだったら、それを作ればいい。だけどハードが最初にあってというのは、やめたらいい。もう逆にしよう、逆に。

昭和初期に住友社員の勤労奉仕で作られた山根グラウンド観覧席。「現在は、成熟社会から次のステージへの過渡期。過去を振り返ることによって、よりよい未来が見えてくる時代」と森賀氏

人とのネットワークが生きがいに繋がってるの

内子町の「フレッシュパークからり」。現在年間の総販売額は六億五千万円を上回る。そこで農村女性起業家として、また農村と都市の交流の草分け的存在として活躍する野田氏。野田氏が考える地域の活性化、そして今後の展開を聞いた。

―野田さんは、「からり」の前身の「内の子市場」の生産組合の第一号会員ということですが、参加しようとしたきっかけはありますか。

野田　ありますね。それは私が二十八年間、お手伝い役というか、自分が主人に使われながらやってきた中でね、自分の役割というか、自分自身にすごく不満を持ってたわけよ。働くのにね。それはなぜかって言ったら、ただ主人に使われて、支配されて、働くだけで、自分の物作るだの、売るだのいうことは、全然なかったし、一番疑問に思ったのは、自分が作ったものを、農協の窓口まで運ぶだけでね、あとどこの誰が食べているのやら、どこに自分たちが作ったものが流れているのやらわからない。そういうような疑問も持ってたし、なにより、使われるだけはしんどいんですよ。

それがまずは内の子市場っていう直売所が出来ることによって、いままでやってきた農業とは違う農業のやり方とか、新しい農業っていうものが、あるんじゃないかっていうのが、私の考えでした。

―その後「からり」を通じて新しい農業、女性が自立出来る農業と出会ったわけですが、なにか変化はありましたか。

野田　特に大きかったのは、平成九年に毎日農業記録賞優秀賞っていうのを取ったんよ。きっかけは、農業がつまらないとか、そういうような諸々のことをあるフォーラムで話したんですが、それを聞

農産物直売の実践による都市住民との「食」と「農」の交流カリスマ

野田　文子

のだ　ふみこ
1946年内子町生まれ。内子町「フレッシュパークからり」第1号会員。98年より「からり特産物直売所」運営協議会会長に就任。現在は、農業の傍ら、直売所経営、女性起業の喜びを人に伝えるべく、忙しい日々を送っている。
03年観光カリスマ（第5回）に選ばれる。

いていた普及員さんが、「野田さんの話はすごく良かった」と。そして、その話を書いてくれって言うんです。それで結局、その普及員さんの熱意に負けて書いちゃったわけよ。そしたら、全国で、その文が優秀賞になったの。

この普及員さんが、私を育ててくれたんよ。「いろんな地域に行ってあなたの話をしてくれ」って。私の農業のこれから、生き方、やり方を「他の地域の方にも反映したい」と言われて、私を呼んでくれたわけ。私を舞台の上に立たせてくれて、人の前でしゃべることもやらせてくれた。

私は、繰り返すことによって、いろんな人と、いろんな世界があるというのを知ったんです。そして人とのネットワークが出来て、これがまたすっごい生きがいに繋がってるの。

私は、この普及員さんに育てられて人の前で話すことが出来るようになった。だから、今度は私が人に伝えていきたい。

―今後の活動や展望ついて教えてください。

野田　そうね、私は、常に言うんだけど、今、「からり」までは人が来ている。だったら、もっとそれより奥に、どうやって人を引っ張り込むことが出来るか、ということを考えていきたい。

―大事なことですよね。

野田　大事よ。もっと奥に、私が住んでいる地域に、どうやって人を呼び込むか。今、私は一年に一回ラベンダーを自分の畑に植えてね、栽培してるんよ。それで毎年六月なんだけど、「ラベンダーを摘みにきませんか」っていう風な取り組みをしてるんです。イベント、体験学習よね。そして毎年、家のラベンダー畑に来てもらって、そこの花の中で一時間くらい摘んで、「からり」に帰ってくるんです。そして、「からり」で工作をして、みんなと一緒に、世代間で交流をして、リピーターを増やしていく。今は、私はそれを年に一回やっているけど、年に一回じゃなくて、そういう人たちに「しいたけ狩りしませんか」とか、そこの場で「バーベキューでもして食べませんか」とかね、そういうような演出、農家が自分の地域で演出できて、それが、交流に繋がればいいなと思ってる。

ラベンダー狩りを、毎年楽しみにして来てくれる定年退職したご夫婦がいてね、今年も、「うちの畑に自由に入っていいから、このラベンダーを守る会でも作ったらいいなー」って私言ったんですよ。そしたら、「そうだね、自分たちが来て、自由に入って、これを咲かすことが出来たらいいな」って言ってました。

結局、私は自分が楽しみたいのよ。畑に来て一時間でもいいから花を摘んで欲しいな。ここに来て関わってもらいたいな。そして、私が住んでいる地域も知ってもらいたいな…。

自宅近くのラベンダー畑。「ここに来て、一緒に花を摘んだりしいたけ狩りをして、地域のことを知ってもらいたい」と野田氏

観光でもまちづくりでも最後はもう人づくりでしょうね

質の高いサービスと営業努力によって松野町「森の国」ブランドを確立した岡田氏。現在「森の国ホテル」は高い稼働率と三十％を超えるリピーターで賑わう。岡田氏が考える観光、また今後の展開を聞いた。

―岡田さんは、Uターンで公社に就職されたそうですが、何かきっかけはあったのですか。

岡田　昭和六十年頃から、自然の大切さが叫ばれはじめましたが、その頃、町では、この滑床を再開発しようと、プロジェクトを組んだんです。

私は、高校を出てから、ずっと町外に出てましてね、ちょうど、その頃、帰って来て、「ここにホテルを建てるんじゃけど、どうやろね」と相談をされたんです。私が四十歳の時ですね。それで、久しぶりに渓谷に上がってみると「あれ、こんなにも、すばらしかったのかな」って、それは歳のせいもあるでしょうけどね。こんなにすばらしい渓谷があるんなら、沢山の人に体感してもらいたい。という話がきっかけなんですけどね。

―「森の国ホテル」が成功している要因の一つに、質の高いサービスがあると思いますが。

岡田　そうですね、スタッフ全員が素人でスタートしたもんですから、オープンから半年くらいは毎晩二時くらいまで残って、反省会をやっていました。

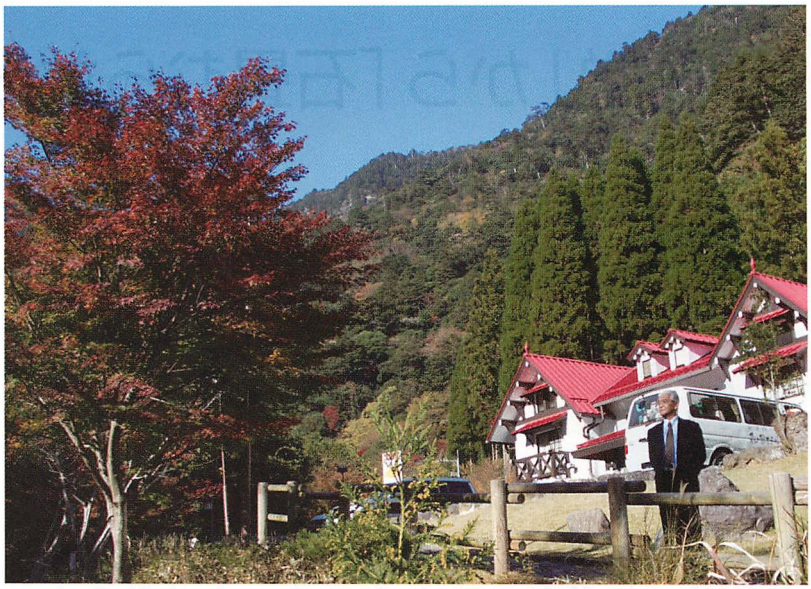
例えば厨房、レストラン、フロントそれぞれのスタッフ、それから私と合わせて七、八人が毎晩反省して、「じゃあ明日はこうしてみよう」と。それでまた問題があったら、また集まる。

お客さんを百％満足させるのは難しいですけど、限りなく近づけないとOKは出ないわけですから。チェックインから

地域のブランド化と広域連携を実現したUターン実務家カリスマ

岡田　春喜

おかだ　はるき
1949年松野町生まれ。愛媛県立北宇和高校卒業後、ふるさとを離れ民間で経験を積んだ後、90年（財）松野観光公社入社。94年「森の国ホテル」支配人就任。98年西四国観光ネットワーク「るーらるぽけっと」会長に就任。現在、観光施設間の広域連携の中心となって活躍中。
03年観光カリスマ（第4回）に選ばれる。



「ここに着くまでの道は狭いけど、苦労して来て、赤い屋根が見えた時の感動は大きい」と岡田氏

ローしていく。これはもう徹底的にやりました。

―スタッフのレベルアップが急務だったわけですね。

岡田　そうですね、平成十年には「るーらるぽけっと」というのを立ち上げたんですが、同じような規模の施設が、目的を一つにして、いろんなことやってみようという取り組みを行っています。今でも続いていますが、広島へ合同キャンペーンに行ってみたり、合同の研修会を開いたり、とにかく、スタッフのレベルアップが第一ですね。

それとやっぱり、人の輪の広がりといいますか、そういうのを広げていかないと、いくらお金を出して、「森の国ホテル」はこういうことやってますよ、と言ったって、今は口コミが一番早いですから。今、営業マネージャーには言ってるんですけど、「森の国ホテル」を売るんじゃなくて、とにかく、「森の国ホテル」の自分を売らないと、お客さんはついてこないよと。物を売るわけじゃないんです。信用を売るわけですからね。

先ほど言いましたが、チェックインからチェックアウトまでお客さんをお預かりするわけですから、もう信用を売るしかないわけです。

ですから、観光でもまちづくりでも、最終はもう人づくりでしょうね。非常にやり甲斐のある課題ですね。

―今後の活動や展望ついて教えてください。

岡田　そうですね、これからは、田舎の良さをどれだけ売りに出来るか、ということでしょう。便利さを求めるよりも、この不便なところを売りにしようとか、そういう部分がキーワードになるような気がしますね。

このホテルの前の道も、これ以上拡張して二車線でどーんと車を着けられても、駐車場も限られてますし、ホテルの受け入れ容量も限られてる。それなら、逆に、この不便さを売り物にしてみよう、ということで、普通車が離合出来る場所の確保と、大型バスが最低限、入れるだけの拡張工事にとどめてるんです。

狭いといっても、ここに到着するまでの二・五キロくらいでしょ。苦労して来て赤い屋根が見えた時の感動といったら、また違うんじゃないかな。うん、もう最低限でいいです、滑床の自然を満喫していただければ！

チェックアウトまでを、いかに過ごしていただくか、満足してもらうかということですからね。どこか一つが悪くてもだめなんですよね、完璧じゃないと。ですからやっぱり内部のコミュニケーション、連携が取れてないといけない。ミスしたら、すぐフロントに伝える、そうするとまたフロントでもお客さんをフォ

「地元学」から「石畳むら並み博物館」へ

内子町
石畳を思う会
安川　徹

「石畳むら並み博物館」

平成十七年十月十五日の日曜日は、生憎の雨にもかかわらず内子町の石畳地区に二〇〇人もの人が訪れて、「石畳むら並み博物館　石畳発ー生活文化の旅２００５秋編」に参加した。この催しの仕組みは、参加者が参加料二千円を支払って、集落のイラスト地図を手に、集落内に散らばっている食べ物や飲み物を提供してくれる場所と名所を歩いて巡るという、農村集落全体が屋根のない博物館となる交流の仕掛けである。この日は石畳地区の内でも竹の成、谷という集落を中心に開催され、用意された食べ物は、草もち、小豆ご飯、味噌田楽、手打ち蕎麦など、いずれも農村ならではのもてなしの品々である。参加者は食べ物に舌鼓を打ち、集落の見所を巡り、農村を満喫して帰っていった。

この生活文化の旅の取り組みは、一昨年開催された「えひめ町並み博」で初めて行われ、同年に石畳地区内の別の集落で二回開催されており、農村の交流の新しいスタイルを提案している。

農家の庭先での食事（写真は昨年のもの）

内子町の石畳地区は、人口が四〇〇人程の農村地域で、屋根つき橋や枝垂れ桜などの名所がある。ここでは、地元の有志による「石畳を思う会」という地域づくりの集団が中心となって村並み保存運動を進めており、水車小屋作りに始まり、地域の景観・環境運動に取り組むほか、地元の女性たちの手によって運営される「石畳の宿」、「水車まつり」など独自の農村づくりを行ってきた。そうした地域の基盤の上に新たな展開として考えられたのが「石畳むら並み博物館」である。この「石畳むら並み博物館」には前出の「石畳発ー生活文化の旅」という催しとは別に、小グループを対象にした蕎麦打ち、味噌作り、炭作り、農作業体験など季節ごとの多彩な農業体験メニューが用意されており、これらは随時受付となっている。実は、この農業体験の方がこれからの本命であると考えている。

蕎麦打ち体験の様子

「地元学」との出会い

この「石畳むら並み博物館」の取り組みは、「石畳を思う会」が平成十三年に水俣市へ研修に出かけ、「地元学」を提唱されている吉本哲郎氏に出会ったことから始まった。翌十四年一月には、「石畳を思う会」で「地元学」の手法により石畳地域の写真を撮って紙にまとめるという作業が行われ、同年五月には、さらにこれを石畳地域全体に広げて自治会主催で開催された。そのときの開催案内文書には「地元学」の目的としてこう書いてある。「地域づくりのなかでモノづくり、事起こしをするうえで最も重要なのは地域を知っているかということなのです。『ないものねだり』をするのではなく『あるものを活かす』こと、その基礎資料、情報の源になるのが地元学です。今の暮らしと地域を見詰め直し、さらに石畳をいい地域とするために石畳地元学を開催します」。

地元学で作成したものの一枚。このような写真を貼り付けたものを20枚ほど作成する。

この自治会の「地元学」では朝九時頃に集まり、地域を歩き農家を訪ねながら気がついたものをすべて写真に撮り、夕方から現像した写真をもとに、農家の庭先の植物の様子や石垣のある風景など、吉本哲郎氏の指導のもと皆で話し合いながら、ジャンルごとに写真を分類して絵地図づくりと資源カードの作成を行った。最初は写真の多さに閉口しながらもグループごとに何となくテーマがまとまっていき、熱心な絵地図作業が夜遅くまで行われた。この作業を通して石畳地域の今まで気がつかなかった「あるもの」を地域全体で共有することが出来た。

この「地元学」で学んだ「あるもの」から発想されたのが「石畳むら並み博物館」である。特に背伸びすることもなく、ありのままの農村の文化・食・歴史が農村交流にとって魅力のある素材であることに気づいてイベントを仕掛けたのである。また「石畳発―生活文化の旅」について、この「石畳むら並み博物館」を手がけた「石畳を思う会」事務局の寶泉武徳氏によれば、島村菜津氏の『スローフードな人生』の中に、「ブラのむらまつり」（イタリア）にチケットを持って、地図を片手に思い思いに集落の中で食べ歩きをするという話があり、そこから着想を得て、地元の人にとってはなんでもない日常の暮らしの豊かさを、外の人から気づかせてもらうような仕掛けでもあるとのことである。

農村は、そこに住んでいる人が考える以上に人を惹きつけるものがある。いつか、特に何も催しがなくても農村を愛でる人達が石畳を訪れ、普通に歩き回るようになるだろうか。その訪れた人が、良く手入れされた農家の庭先で食を楽しむようになるだろうか。「地元学」から生まれた「石畳むら並み博物館」は、そんな農村の未来を志向する試みである。

地元学の絵地図作成の様子

村の一軒家に人を呼ぶ

久万高原町
久万農業公園　係長
高岡　啓一
http://www.netwave.or.jp/~kumaagri/

久万高原町は、四国の中で一番星に近い町、夏でも朝の気温が二〇度前後で厳寒期は、零下四度前後と夏は四国の軽井沢、冬は四国の北海道と呼ばれる所以である。

年間雨量は二三〇〇ミリ前後と多く、四国一を誇る林業とともに、トマトを中心とする高冷地野菜は、関西市場での銘柄産地となっている。

我が町には、皿が嶺・石鎚山・面河渓谷・四国カルスト等の大自然にも恵まれているとともに、大宝寺・岩屋寺と二つの四国霊場があり、一年を通じお遍路さんが行き交う田舎の原風景が残されている。

農業公園の機能と役割

久万農業公園は、新規就農者育成の為の研修施設とともに、都市農村交流を目的とした市民農園施設（クラインガルテン）を整備している。

新規就農者育成については、技術研修、農地の取得、就農時の支援対策等が総合的に整備されており、過去二〇名の若者を受け入れ、内一五名の若者が地域に定住し農業を開始している。

都市農村交流の取組み

他方の都市農村交流事業の展開にあたっては、メイン施設となるクラインガルテンについて、開設当初からログハウス付農園に人気が集中し、農園タイプについては、契約率の低下が続いた。

この結果について利用者の意見を集約すると「高原で農園付きログハウスが持てる」という満足感が特徴的に評価され、他方の農園タイプについては、休憩施設の不備とともに十坪二万五千円の利用料がネックであり、途中利用料の引下げを行った結果、全区画全契約に至った経過があり、市民農園の開設にあたっては「利用者側の目線」で体制整備することが大きなポイントであることが窺えた。

又、当施設の特徴として田舎体験交流もセットしており、四季折々の田舎体験行事を仕掛け、利用者からは、「交流行事を楽しみに来ている」の声も聞かれる。

当園は、国道からも離れ（約六キロ）町の基幹道から一キロ入った田園地帯に

クライガルテンの生協芋掘り体験

あり、二ヘクタールの研修農場と一ヘクタールの市民農園・ふれあい広場・管理事務所があるのみで、観光的施設は整備されていない現状である。

当農業公園における都市農村交流の展開にあたっては、農村住民と都市住民の交流を原則とし「地元住民の力で都市農村交流を推進し、将来交流を通じた起業展開をやろう」と三十一名のメンバーで「畑野川商会」を発足、市民農園の管理・作業指導・公園市場への特産物出荷・合同クリーンデーの開催・収穫祭の開催・交流行事の共同開催等、地元受け入れ側の体制ができている。

クライガルテンの作業風景

本場韓国のキムチ漬け体験

農業公園では、まず研修農場で生産される四季の花壇苗の直売と地域特産品販売の為の公園市場を開設。それまで直売されていた研修農場のいちごは、体験農園として農産物を通じた交流事業を展開し、「冬枯れの久万高原に人を呼ぶ」ことが大きな成果となった。

都市農村交流の概念

交流事業の展開については、地域にある魅力的な資源を掘り起こし、地域の自然や歴史・産業・文化・名人技それぞれを発掘することにより四季折々種々の体験交流メニューが創造され、この仕掛けこそが交流展開の原点であり、地域再発見の行動を起こすことがスタート地点となっている。

都市農村交流は、立派な施設でなく「農村のあるがままの姿を体験し感動と満足を与える」ことが大きな使命と考えられ、結果的に農村に人が流れ、感動と満足に相当する実費が農村側に落ちる仕組みと考える。

このことは、従前からの物産とお金の交流とは大きな隔たりがあり、意識の転換が必要である。

都市農村交流は、面的には、生産農業一辺倒から消費者参入型の農業展開も期待され、交流事業の展開は、今後の農村の活性化に大きく貢献できるものと確信している。

地元上浮穴高校協力による焼き杉のプランター作り体験

農林業体感民泊「天辺」を介して

久万高原町
天　辺
松本　宣子
http://www2.ocn.ne.jp/~teppnda/

農林業体感民泊「天辺」の紹介

私たちは、松山市と高知市を結ぶルート三十三号線の中ほど、両市より約六十キロの地点の、愛媛県境に住んでおります。愛媛県と高知県との融合地点であることが、人・建物、風土と様々なことに見られます。

「天辺」の雪景色

山里での生活様式も年代と共に移り変わりました。都市化への波はこんな山里へも忍び寄り、昭和三十年代以降より大勢の人々が街へ転出して行き、かつてはどこまでも耕され、明るく広く広がっていた山畑、農地も今は杉、桧の植林にとって変わられ、一年中濃緑の単調な色彩になってしまいました。あちらこちらと、点在している村々も、農家数の減少と成長する木々の為、年毎に狭められつつあるのが現状なのです。

国道三十三号線の県境手前約二キロくらいの左側の町道を登ること約二分で私どもの経営する農林業体感民泊「天辺」へ到着いたします。車を降り一足登るごとに風景が変わります。

眼下には仁淀川、真向かいには四国山脈の山々が連なり空がどこまでも広がっております。

かつて、高知県船戸地区で仁淀川の船宿として建てられ営業されていた建築物を、解体移築約六十年の家屋をそっくりそのまま民宿として活用しております。私たちの住まいとは別棟です。「天井が高い」「廻り廊下がある」と、訪れた方々は喜ばれます。静かな農山村の家屋に身を置き、清らかな大自然のなかに、すっぽりと包まれるということにより、癒され、楽しんでいただく趣旨にまさにぴったりのお宿だとおもいます。

オープンへの経緯

約二年余前のことです。グリーンは農村、ツーリズムとは観光。今までの観光地めぐり等と違って、農村、農家そのものを観光として客を迎え入れるビジネスだということを偶然知りました。現代社会において、都会の人々はとても疲れている。癒しを求めている。そして農家

新茶を天日干し

民泊とは、農業の一端であり、農家の主婦が生活の片手間に、農家の空き家、空き部屋へ都会の方々を迎え入れてあげる事。元々はドイツを発生地として起こり、基本は、BアンドB、つまりベットと朝食……ということなんだそうです。先進地視察、グリーンツーリズムの専門講座受講、あわせて家屋の改築、修繕と私の周りは俄かに忙しくなってまいりました。どんどん進んでいく事柄の中で、果たして、こんな辺鄙な田舎へ人様が来てくれるものだろうかという一抹の不安は心の隅にありました。でも、田舎住まいが好きで、五十年余をこの地で生きてきたという証。樹齢数百年の木々。四季折々に咲く様々な草木。棚田での米作り。今の私たちの等身大の生き様、この場所へ、都会の方をすっぽりと受け入れてあげる空間を作ってみようと思ったのです。正式に旅館業として登録する為、消防署、保健所へも何度も足を運び様々な指導を受けました。登録する為の屋号は、いろいろ迷いましたけれど、眺めがいいのと私が以前書いていた詩の題名より、思い切って「天辺」と、致しました。そして平成十四年十月にオープン致しました。

棚田植え付け後

総合学習風景　柳谷中学校

訪れた人々との交流

何しろ、海のものとも山のものとも付かないこの取り組み。不安材料だらけでした。今までも、結構忙しい中での新たなるビジネス。そこで、宿泊もランチもすべて予約制としよう。そうすれば明日の仕事の予定が立つ。普段は、何時もどおり、農家の生活をし、予約を受けたときだけ、お客様をお迎えしようと、決めました。ホームページも開設いたしました。どんな方が来て下さるのかしら、という楽しみも増えました。私たち家族の交流の輪。廻りの方々のありがたい後押し。少しずつ、少しずつ確実に「天辺」の輪は広がって来て居ります。お料理、接客、宿泊とすべてに、かつての宿坊での経験が役に立っております。「御持手成しを有難うございました」とのお礼状を度々頂戴いたします。豊かな大自然のなかでゆっくりと時の流れを楽しむひと時。訪れてくださった方々との様々な会話。「田舎の良さを提供して都会の元気を頂く」素朴での交流。ともすれば、見捨てられ、置き去りにされがちの農山村。そうでは無い。こんなにもすばらしい田舎暮らし。身をもって示し、心豊かに生きて行きたいと思っております。

明神山登山

交流・協働・特区で地域が元気に!!

新居浜市 大島
NPO法人 GOODWILL
理事　矢野　鐵二
（矢野メガネ時計店三代目）
http://www.nbn.ne.jp/goodwill

このページの上部地図、新居浜市のところをよくご覧ください（老眼の方はメガネをお掛け下さい）。小さな島が見えると思います、この島が『大島』です。その昔、村上水軍の頭領村上義弘が生まれた島とも言われ、船隠しなどの地名が残り、古くからの良港として栄え（昔周辺の島をふくめ大黒島とも呼ばれていた）海運の要となっていました。そのせいか、島内には幾つもの神社やお寺があり、昔領土を取り合いした名残ではないかと言われています。遠くは中国、東南アジアまで海を渡り、太鼓祭りやだんじり祭りなど、多くの文化を伝えたとも言われてます。又、長崎などに親戚がある家も多く、青い目の子供の話し・幽霊の片袖の話などの多くの民話や伝説も残っています。

元気に老いて行ける地域づくり

多いときは二千人あまり居たといわれる人口も、今では三百数十名になり、高齢化率もかなり高い地域。ともすれば、行政からも忘れられがちになり要望も通りにくい。救急の時には漁船に戸板で対岸の黒島港へ運び、そこから救急車で病院へ。「大島はほっとかれとるんじゃ。」そんな声が聞かれるのが、何年か前の大島でした。そんな大島が変わりだしたのは、のちに『NPO法人わくわくアイランド大島（以下わくわく）』となる、香西さんを代表とするグループが出来たことでした。「わしら年寄りでも出来ることは有る。何からでもやって、元気に年取っていける、年寄りが安心して住める島にしょうや。」の掛け声のもと、「何が出来るかわからんけどやってみるか。」と、賛同者が集まり活動がはじまりました。

NPO法人格取得と協働事業

活動を始めて直面したのが、活動資金の問題でした。何をするのにも材料費や色々な経費の負担がいる、メンバーの持ち出しばかりでは長続きは難しい。そこで目をつけたのが、島内一周道路の整備事業でした。今は、市内の業者が市から委託を受けてやっている、それを自分たちでやれないか。その為には、NPOの法人格を取り、市の信用を得る必要がある。「ヨーシ、取ろうじゃないか。」その結果、現在のわくわくが出来、貴重な資金源となる市との協働事業を獲得しました。おかげで道路幅はかなり拡がり、島民に喜ばれています。

GOODWILLとわくわくの協働事業・和井田の浜 ヒマラヤ桜植樹

GOODWILLとわくわくとの交流

ボランティアを支援するNPOとして、我々GOODWILLは設立されました。「大島を見捨てると、何十年かあとの新居浜市も見捨てられる。今の大島は、先の新居浜市である。」との理事長の一声により、わくわくとの交流が始まりました。最初のうちは、地域通貨の導入などに取り組みました。次に、カブトムシ農園事業。この頃から、私も参加し始めました。島で感じた事は、「島の年寄りは元気やナー」でした。そして、作業が終わると心づくしの炊き出しで歓迎してくれました。和井田の浜で食べたいりこ飯やえびの掻揚げのおいしかったこと、いっぺんで島が好きになりました。それから何かあるごとに島を訪れるようになり、島の皆さんに色々な話を聞かせてもらい、大島のことや歴史を教えていただきました。

水質浄化プロジェクト&白いも特区

島の人と仲良くなるにつれ、「島には下水がない、しかし、海をきれいにしたい。生ごみの減量化をしたい。」とか、「島の特産品は、白いもとみかん、あとは漁業、芋畑も高齢化で年々減っていく。あと何年かしたら白いもが、無くなるかもしれん。」そんな声が聞こえてきました。そこで、水の浄化には「えひめAI-1」の導入をサポートし、生ごみには、コンポストの利用を提案しました。白いもについては、昨年まず焼酎を実験的に造りました。これが大変評判がよく約一ヶ月で完売でした。白いものブランド化にも挑戦し、東京の伊勢丹で販売したところ大好評でした。「さあ増産」と行きたい所ですが、肝心の白いもの収量は限られています。「それなら芋を自分たちで作ろか。」「もっと多くの人が芋作りに参加できる方法は無いだろか?」そんな発想のもと白いも特区の申請が行われ、昨年の十二月に認定いただきました。まずは、市民へのアピールとあたらしい商品の開発を目指し白いもお菓子コンテストを開催しました。そして、三反の畑でオーナー会員さんを募り、白いもの栽培を開始し、大島の方に教えてもらいながらようやく収穫のときを向かえました。

水質浄化プロジェクト

白いも掘り

白いもお菓子コンテスト

これからの課題

大島での取り組みも着実に成果を結び、島の人も元気に活動している。しかし、これから、五年、十年と、この活動をいつまで続けていけるのか?今一番若いわくわくのメンバーで六十五歳である。せっかく芽が出た新しい取り組みを永く続けていく為に、島外のみんなも巻き込んでの何か新しい仕組みづくり、そんなことが出来ればいいなと考えています。

論談 ―まちづくり―

理科系の観光地域づくり

(社)日本観光協会
調査企画部長 古賀 学

観光地づくりデータベース
http://www.kankouchidukuri.jp
全国地域観光情報センター
http://www.nihon-kankou.or.jp
月刊観光
http://online.nihon-kankou.or.jp

旅の基本は、文化系の旅にあった

最近、旅や観光地域づくりにも、文化系と理科系があるのではと思い始めている。

改めて広辞苑をみると、「理系：理科の系統。理・工・農・医・薬などの学部を指す。」「文系：文科に属する系統」とかかれている。

今までの多くの旅は、どちらかというと文化系に基本があったのではないのか。歴史文化や感性に訴える旅である。人情と美味しさだけを追求するテレビの旅番組を見て旅に出るのも、その一つである。心象に訴える情緒的な雰囲気などが旅の基調となっている。

なぜ、文化系の旅が主流をなしてきたのか。それは簡単なことで、旅を作る人たちが、圧倒的に文系の人が多かったからである。いわゆる旅行会社はどちらかというと文化系の仕事であり、今も基本は変わらないであろう。そして、行政で観光に携わる人、観光協会の役職員など、そのほとんどは文化系であろう。当然、旅づくりの視点は、文化系になる。

求められてきた理科系の旅

もちろん、文化系の旅が悪いと言っているわけでもない。あれも旅、これも旅である。しかし、どこか旅にもの足りなさを感じている人も多いのではないだろうか。

最近、グリーン・ツーリズム、エコ・ツーリズム、フラワー・ツーリズム、産業観光、ヘルス・ツーリズム等々、ニュー・ツーリズムといわれるやたらカタカナの多い旅行タイプが現出してきた。しかし、ここで問題となるのは、今までの観光形態と何がどう違うのか、ということである。グリーン・ツーリズムと今まで行われてきた農業観光、観光農業とどう違うのかである。自然体験とエコ・ツーリズムはどう違うのかである。

一番大きな違いは、専門家の介在であろう。実は、かれらは理科系が多い。ものを作る人、自然の仕組みを教える人、身体を治す人、農業を営む人などである。そして、観光客は、自分達観光客用の地域を知りたいのではなく、未知の地域についての専門家の知識を求めている。歴史、芸術なども同様ではあるが、理科系の専門分野は、特に特化型であり、その分取っ付きにくい。だからこそ、専門家の介在が必要であり、そうするとそこがおもしろさに変わる。現在一〇〇〇以上の組織がある観光ボランティアガイドも、大半は文系の方々で構成されており、理科系の方はほとんどいないのではなかろうか。

もっと理科系の人の参画を

ある教育本に、理科系人間の基本は、子供の時の好奇心にあるのでは、と書かれていた。今、理科系離れといわれている大きな原因は、この子供の好奇心をかき立てるような体験が少ないからではないか。旅も然りかもしれない。そのせいか、若者の旅離れが甚だしい。

これからの観光地域づくりに必要なものの一つは、文化系と理科系の協調かもしれない。

人材として売れるのは、理科系の頭と文系の感性を持った人材であると、やはりある本に書いてあった。観光地もそうではなかろうか。

ノーベル賞小柴さんのメッセージ
（東京・日本科学未来館）

総務省、国交省、農水省が中心となり選定した観光カリスマの方々には、農業関係者はもとより、歯医者さん、木工・建築関係、獣医さん、そして水産関係出身など、実は理科系に属する人が多くいる。当然、職業や前歴から選定が行われたわけではない。執拗なまでの生まれ持った好奇心から、今までの旅や観光地域づくりになかった発想、そして、いつしか人を引き込んでしまう類い希なる手法による夢の実現化が、実によく目立ったのではなかろうか。

地域で観光を考えるとき、よく女性の参加が求められる。これからは、その中に理科系の地域の人がいるかどうかにも目を向けてみよう。そして、専門家としての発言を積極的に求めてみよう。

好奇心をかき立てるような旅づくり・地域づくり

この間、スギ花粉リトリート・ツアーを中心とするヘルス・ツーリズムのシンポジウムを行った。その牽引役の一人である医大の教授が、観光について熱弁をふるわれた。実に新鮮な、わくわくする期待感を感じ取ることができた。

よく、観光振興等の委員会における人選で、肩書きよりも現場の人を、という。理科系の人は、そのほとんどは実は現場の人なのである。この言葉の裏にはすでに理科系の参画を、という意味が多分に含まれていたのである。当然、プランナーやコンサルには理科系も多いが、外部の理科系は直接的には役に立たない。

グリーン・ツーリズムやエコ・ツーリズムなど、カタカナ単語を使うのも、何となく理科系っぽいからかもしれない。今一度、文化系という情緒性、感性に訴える旅に加えて、理科系という視点からの観光地域づくりを考えてみると、今までになかった好奇心をかき立てるような地域づくりと、新たな観光の姿が見えてくるかもしれない。

ネパールとの交流によりネパールの石組技術で作られた護岸。護岸ですらも、一言加えることにより地域の大切な観光資源になりうる。（富山県南砺市利賀村）

～宮崎県児湯郡西米良村～

過疎に光をあてた ワーキングホリデー

西米良村長 黒木定藏

http://www.nishimera.jp/nishimera/

私の住む西米良村

私の住む宮崎県児湯郡西米良村は、九州山地のど真ん中、熊本県境に接する人口千四百人あまりの小さな村である。村土の九十六パーセントを重畳たる山々に囲まれた山村で、戦後の化石燃料へのエネルギーの転換や、都市集中化等によって過疎の波に飲み込まれてしまった過去をもつ。歴史的には、古く、平家一門が落ち、南北朝時代、北朝方に追われた熊本県の菊池一族が密かに落ち、この地を治めたと伝えられる。まさに隠遁の地なのである。山深い地であるがゆえに育まれてきた独特の山村文化が今でも豊かに保たれている。

鄙びた田舎の宝探し

人の心を引きつける魅力が、この辺鄙な田舎にあるのか?、私は、まずはその「宝探し」から始めることにした。どの土地にもそれぞれの歴史や文化が育まれ、その土地を特徴づける何かがあるはずである幸いにして、私たちの村にも豊潤な森と清冽な川の流れ、悠久の時を越え受け継がれてきた古き良き伝統・文化が伝わっている。

パンジーの出荷準備

さらによく見ると、厳しい環境の中での人々の「生きる術」「生活の知恵」が随所に見えてきたのである。

先進地に学んだ地域ぐるみの観光振興

数年前、ヨーロッパの視察に行く機会に恵まれ、私は新たな発見と衝撃を得ることとなった。そこで繰り広げられていた「観光」は、いずれの地においても、住民が自らの村に誇りを持ち、恵まれた自然環境を保ち活かしながら、リピーターを大切にする施策に自ら楽しみながら取り組んでいることが実を結んでいる。私たちも足らざるを悔いるのではなく、与えられた現在の環境の下で、知恵を使い努力をすれば、新たな可能性があることを示唆されているように感じられたのは、私にとって大変な収穫であった。

ほおずきの出荷準備

何もない村に本当に人が来るのか?

もうすぐ、団塊の世代のリタイヤが始まり、高度な知識や感覚を持ち元気な高齢者が大量に世に溢れ、余暇活動に生きがいを求める人が急増する。そういう

ゆずの収穫

人々が地方に目を向け、都市と地方の交流が始まりつつある。都会と地方の交流対策『ワーキングホリデー制度』の創設となった。

何もないこの地に、果たして人が来てくれるのだろうか？「ワーキングホリデー」という言葉一つで…。最初は、正直そう思った。

しかし、「案ずるより産むが易し」の譬えの通りとなった。マスコミのお陰で、新鮮でユニークなこの取り組みが全国に流され、電話のベルが鳴り始めた。

参加者を癒し、村を潤すワーキングホリデー

「ワーキングホリデー」その国内版を始めたわけである。ワーキングホリデー参加者は、農作業等を手伝いながら報酬を得、安い費用で、中・長期間滞在も可能となり、自然の中でリフレッシュしながら異文化体験もできる。受け入れ側にとっては、繁忙期の人手不足の解消と事業量の拡大による所得の向上を目指せ、互いにメリットが生じる制度となっている。さらにこの制度の実施には、第三セクター「㈱米良の庄」が介在し、需給バランスの調整をするとともに、ワーカーさんたち（地元の人たちはこう呼ぶ）のお世話をすることにより、食事・宿泊等による滞在経費の受け皿となることによって、「農業→ワーキングホリデー参加者→米良の庄」のシステムの中で、農家の支払った費用が最終的には「米良の庄」に移行し、仕事　が村に残る仕組みである。制度実施にあたり、最も大切なことは、受け入れ側が楽しみながら積　極的に参加することである。受け入れ側の態度一つで成否が決まると言っても過言ではない。幸いにして私たちの地域では、現在もリピート率が二〇％を超え、個々に触れ合い交流を続けているケースも多く、上手く機能していると言える。

ほおずきの選別

息を吹き返した村は進化する

ワーキングホリデーで来られた人との交流の中で、日頃から当然と思い気にもかけなかった暮らしに改めてその価値や違いに気付かされることも多い。何よりの好転は、住民の中で「地域活力」をつけるために数多くの新しい取り組みが始まったことである。西米良温泉「ゆた～と」では朝風呂会・夕風呂会が発足し、一番風呂の報酬と引き換えに、毎日早朝の清掃作業を高齢者の皆さんが、夜中の清掃作業を若者がボランティアで行い、清潔で快適な温泉施設を守っている。また、若者たちが、村の特産物で村おこしを始めた。次々に新たな活動が生まれ、効果を上げている。

過疎を地域の活力にする

これからさらに個性化は進み、ニーズの多様化もさらに進むと思う。すべての要求に応えることはできないが、自分たちの持つ環境や文化に共感をしてくれる人たちは必ずいることを信じて、人を磨き地域を磨くことに努めたいと思う。そして何よりヨーロッパの先進地に見るように、この地をどこよりも誰よりも愛してくれる人々が協働し、楽しく暮らしていれば、必ず人の心を捉え動かすことができると思う。ワーキングホリデー制度は地域の生活レベルまで入りこむ体験であるがゆえ、高感度な都市住民の感動メーターを、きっとメモリー杯振り切れそうになるまで振動させてくれるに違いない。私はこれからも春秋に富む姿勢を忘れずに、「カリコボーズ※の休暇村・米良の庄」づくりにチャレンジし続けようと思っている。

※米良地方に古くから伝わる山や川の妖精。
西米良村では、カリコボーズが息づくような昔ながらの森をつくり、そこに息づくものと共生していく村づくりを目指している。

大学生が考えた「住みたいまちの条件」と「訪ねたいまちの条件」

えひめ地域づくり研究会議　代表運営委員　若松　進一

大学生が考えた「住みたいまち」の条件モデル

帰ってこいよ。
～おじいちゃん、おばあちゃんになっても住みたいまちへ～

No.	環境	No.	産業	No.	行政	No.	娯楽
1	空気がおいしい	1	商店街がある	1	ごみの回収が早い	1	おいしいものが沢山ある
2	道が広い	2	特産物がある	2	バリアフリーが整っている	2	映画館がある
3	列車が通っている	3	就職先がある	3	福祉施設がある	3	祭り（イベント）が多い
4	川が汚れていない	4	コンビニ（24h）がある	4	医療施設がある	4	温泉がある
5	交通マナーが良い	5	交通網がしっかりしている	5	防災組織がある	5	カルチャースクールがある
6	まちを展望できる	6	総合ショッピングセンターがある	6	環境問題に取り組んでいる	6	ショッピング街がある
7	静かな環境	7	ITが整備されている	7	町内会の組織がしっかりしている	7	いやしのものがある
8	住民が親切	8	農業・林業が盛ん	8	教育施設が整っている	8	いこいの広場がある
9	緑がある	9	都市が近い	9	国際交流が盛んである	9	スポーツ施設がある
10	携帯の不通区域がない	10	特色のある産業がある	10	下水処理場がある	10	レンタルショップがある

条件モデルの考察

紙面の都合で資料が前月号と今月号に分かれたため比較検討には難点があるが、あまり知識を持たない時期での条件設定と、学習や調査をした結果作成した条件モデルとでは次の項目において大きな差のあることが読み取れる。

①理想のまちづくりを進めるためには、まちづくりの目標ともいえるキャッチフレーズをまず考え、どのような地域資源を生かし何のためにまちづくりを誰がするのかといった基本コンセプトをしっかり議論するようになった。キャッチフレーズを考える時には訪ねたまちや自分の生まれ育ったまちを意識しながら、より質の高いクオリティを求めている。

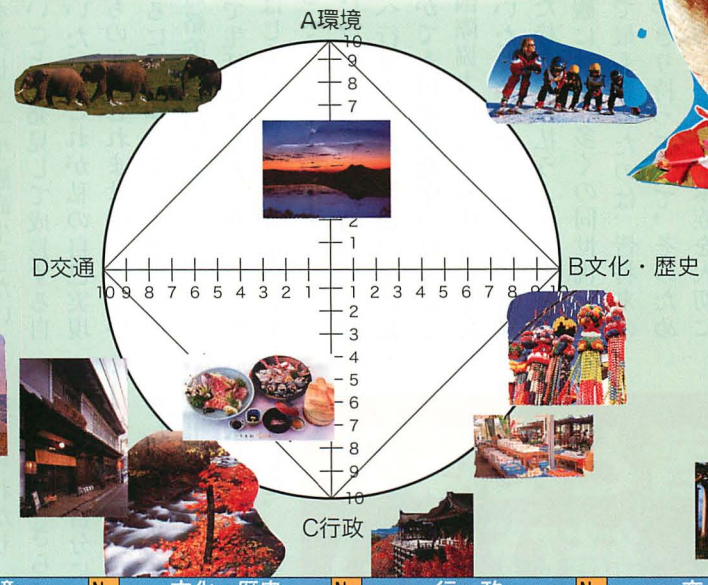
②キャッチフレーズで示した目標実現に必要な四つの目標に「住みたいまち」「訪ねたいまち」とも、大きな変化が生じた。

③条件モデルの設定では「訪ねたいまち」の魅力イメージではどちらかといえばテーマパークのような華やかさを、「住みたいまち」

前号で紹介した四つのまちを巡って調査した資料と私の七回に及ぶ地域振興とまちづくりの講義、それに訪ねたそれぞれのまちでまちづくり人から聞いた含蓄のある裏話や苦労話を基にワークショップを行い、「住みたいまち」と「訪ねたいまち」のモデルをそれぞれの班で作成し発表したので紹介する。

大学生が考えた「訪ねたいまち」の条件モデル

リフレッシュ！
～四季を感じ、心やすらぐ、ふれあいのまち～



No.	環　境	No.	文化・歴史	No.	行　政	No.	交　通
1	川が汚れていない	1	伝統芸能がある	1	公園がある	1	街灯が整備されている
2	川に生きものが住んでいる	2	イベント（祭り）がある	2	観光案内をするものがある	2	列車が通っている
3	水がおいしい	3	名所がある	3	バリアフリーが整っている	3	交通マナーが良い
4	空気がおいしい	4	にぎやかで活気がある	4	観光施設にトイレが整備されている	4	歩行者専用の道がある
5	景気が良い	5	史跡がある	5	広い駐車場がある	5	観光バスが運行している
6	公害がない	6	昔話・伝説郷土史がある	6	治安が良い	6	道路が整備されている
7	無駄に広告の看板が無い	7	偉人を輩出した	7	医療施設がある	7	主要道路がある
8	緑が多い	8	資料館がある	8	観光施設がある	8	渋滞が起こりにくい
9	ゴミが落ちていない	9	古いまちなみが残っている	9	宿泊施設がある	9	交通アクセスが良い
10	環境に配慮した河川整備がされている	10	特産物や郷土料理が残っている	10	環境問題に対する取組みをしている	10	交通情報の発信

の魅力イメージは便利さや活気といった表面上でとらえるきらいがあったが、条件モデルでは交通アクセスや病院、学校といった社会資本の充実による利便性は勿論のこと、快適環境や行政の質的サービス、住民参加の有り様、ライフサイクルへの適合、少子高齢化への対応など、どの項目も新しいまちづくりにとって極めて重要なクリア事項が含まれている。未だ自立していない若者、特に大学生にとってまちづくりは今の所さして重要なテーマではない。むしろ就職難やニートが社会問題になっていることもあって、二～三年後に迫った就職という人生を決める大きな関門をどうくぐるかに意識は集中している。しかし学生も社会の一員であることや、市民の殆どがまちづくりは行政や一部の人の仕事であるかのような、意識と行動が目立つ昨今の社会情勢を思うとき、健全な市民を育てる意味からもまちづくりの正しい知識を大学生の時代に習得させることが大切であると、今回のかかわりの中で痛感した。

若者と地域を結びたい

松山市
Eyes
横山　史
Eyes URL
http://www.npoeyes.net

夢を叶えるために、都会に出て行く若者は大勢います。かつては私もその一人でしたが今年、八年半ぶりに故郷愛媛に暮らすことにしました。夢を諦めて帰ってきたのではなく、夢を叶えるために愛媛で仕事を創ることを選びました。

瞬間瞬間を楽しく一生懸命生きたい、いつも新しいことを発見して成長する自分を感じていたい、これが私の自己実現欲求というものかもしれません。「新しいものと接するには、知らない土地に行かなければ」短絡的にそのように考え、県外そして海外で生活しました。そして愛媛から離れてはじめて、思いもかけず故郷を深く意識するようになったのです。

学生時代には留学や旅行を通じて主にアジア各地へ行きました。答えのない社会科学のなかでも国際開発学の魅力にとりつかれ、国際協力に関わる仕事がしたいと考えていたためです。これまで常識と思っていた枠を取り払うような多様な文化や価値観に触れ、多くの同世代と親しくする中で最も驚いたのは、皆将来の自分像をはっきり持っていて、そのために一生懸命勉強し、そして家族を大切にしているということです。これは自分自身に、そして今の豊か過ぎる日本に足りないものだと感じました。そしてどこかの誰かへ手を差し伸べたいと思う前に、日本にある課題を直視し、自分自身のフィールドでしっかりと生活してみようと思いました。この時が、海外から日本へと私の視点が移った瞬間です。

その後東京で仕事をするようになったのですが、自己紹介する度に愛媛の認知度が低いことを認識しました。愛知と間違えられたり、四国四県の区別がつかなかったり。さらにあまりにも無知で説明できない自分にも気付き、もっと故郷を知りたいという気持ちと、何か愛媛県人としてのアイデンティティのようなものが生まれてきました。こうしてついには日本から地元へ視点が絞られることになりました。

私が地元へ戻って仕事を創っていこうと決断できたのは、たくさんの人から支援やヒントを頂いたおかげですが、仕事を楽しめるか成長できるかは「環境ではなく自分次第」ということが私の中でやっと理解できたからでもあります。どこにいても同じ、最後は自分の考え方や行動の一つひとつがチャンスに繋がります。Eyesでは、可能性を拡げられる思考を身に付け、実社会で行動に移せる機会として、学生の実践型インターンシップを展開しています。

愛媛でも出来ることがあると始めた事業ですが、「愛媛マンダリンパイレーツ地域密着化」「今治タオルのプロデュース」など、愛媛にしかないインターンシップを創ることができました。地域企業のチャレンジに若者がビジョンを共有して参画し、一緒に挑戦するプロジェクト。その過程で、企業と若者両者が学びと成果を得られるように、コーディネートに全力を注いでいます。そして何よりも、新鮮な出会いと発見で私自身が仕事を楽しんでいる毎日です。

「大学生が愛媛の人を取材したフリーペーパー colors*（カラーズ）」

「愛U」の1～4号。来年の一月中旬に5号を創刊予定！
ぜひ、読んでください。また、ご意見や載せてほしい情報も募集中です。

愛のあふれる『愛U』を目指して

松山市
SCV メディアサポーター出版部
樽本　真由美
SCV URL
http://media-supporter.cite.ehime-u.ac.jp/

「愛大（愛媛大学）のことなら樽本に聞け」。そう言われるくらい愛大を一番知っている人間になりたい。これが、私の目標であり、常に心がけていることです。

愛大には、学習支援、生活支援、障害学生支援、留学生支援などの活動を通して、学生相互に「教えあい」「学びあい」「助け合う」力を高めることを目的とした「スチューデント・キャンパス・ボランティア（SCV）」という組織があります。私はSCVの組織のひとつである「メディアサポーター出版部」の学生編集長として、学友と学内広報誌『愛U（ラブユー）』を年四回発行しています。

『愛U』は、これまで大学職員が編集してこられた「学務部だより」をリニューアルしたもので、今年二月に創刊しました。A四版八ページ。最新刊は十一月に発行した第四号で、学祭を特集しました。これまでにも、ユニークな愛大生を取り上げた「ようこそウワサの人インタビュー」（創刊号）、新入生のための「サークル紹介」（二号）、夏休みの過ごし方のヒントになるように「旅行特集」（三号）などを取り上げてきています。

『愛U』の「愛」は、愛大の「愛」というだけでなく、愛大を「愛」するという意味も含んでいます。ですから『愛U』には、もっと愛大を好きになってもらいたいという思いがたくさん詰まっています。広告代理店の協力も得ていますが、企画から取材、製作、配布まですべてを私たち出版部が担当しています。編集部員は八名。少ない人数ながらも、お互いに助け合いながら、楽しく『愛U』を作っています。日中働いている夜間主コースの編集部員もいますので編集会議は午前七時半から。みんなが参加できるよう、ちょっとだけ早起きして頑張っています。

創刊したての頃は、あいテレビの情報フリーペーパー「ラブ・ユー」とよく間違われ、悔しい思いもしました。知名度を上げようと、昼休みなどを利用して学内で手渡しをしたり、サークルボックスを回って配布したり……。始めのうちは受け取ってすらもらえませんでしたが、「もっと自分たちの愛大を知ってほしい」という思いで、手渡しを続けていくうちに、だんだんと読んでくれる学生が増え、最近では、次号を楽しみにしていてくれる読者も少しではありますが出てきました。こうした経験を通じて実感したのは「まずは自分たちが愛大を一番に知り、愛していなくては、学生が読んでくれるものは作れない」ということ。ですから、私の目標は「愛大を一番知っている人間」になることなんです。

今後は、一人でも多くの愛大生に読んでもらえるよう、今以上に「愛」のある『愛U』作りを心がけていくのはもちろんですが、『愛U』を大学の中だけにとどまらせず、広く地域にかわいがられる広報誌に育てていきたいと思うようになりました。『愛U』を通して愛大の情報を地域に発信することができれば、『愛U』は地域と大学の架け橋になるでしょう。夢のような話ですが、一歩ずつ努力を積み重ねていこうと考えています。

鞏福橋

"MY TOWN" うぉっちんぐ

歩キ目デス&足ラテス

第34弾

「中国の屋根付き橋『風雨橋』の不思議」

まちなみ探偵団
岡崎直司

昨年の夏、私は何故か中国の少数民族トン族の村に居た。場所は、中国では広東省と共に最南部である広西チワン族自治区、あの山水画のような風景で知られる桂林の奥である。緯度的には台湾の北部にあたり、日本からはかなり南に位置する。

橋で遊ぶ子供たち

目的は、かの地で「風雨橋」と呼ばれる屋根付き橋の調査旅行。日本でも有数の橋の専門家の方々に同行させていただく機会を得た。屋根付き橋と言えば、特に我々の地域には肱川水系沿いにその分布があり、昨今は観光的にも随分と知られるようになってきた。しかし隣国には、桁外れの屋根付き橋があるという。確かに現地で驚いた。これは橋なのに、土木というより立派な建築物だった。

まず最初にお目にかかったのが「程陽永済橋」(写真①)。一九一二年から十二年かけて建設されたといわれる。桂林からの最短道路が工事中のため、何時間もバスで迂回してたどり着いたのは、貴州省や湖南省に接する三江県のとある村。といっても、不思議なことに周囲に人家は無く、集落は少し離れたところにある。ともかく、そのスケールと構造美に圧倒され、しばらくはポカンとしていたような気がする。しかもこうしたタイプの橋が大なり小なり、トン族の村々にこの周辺だけでも一〇〇橋以上分布しているというから驚くほかはない。

日本国内で似たような建築をあえて探すと、平等院鳳凰堂をそのまま持ち上げて橋にしたような。いくつもの楼閣と何層にもなったその瓦屋根、過剰なまでの漆喰(しっくい)による隅棟(すみむね)のハネあげた形。どう表現したらよいのか、単なる橋に何故にこれほどまでの装飾性を施さなければならなかったのか。本来、屋根付き橋としての目的は、木橋をいかに長持ちさせるか、という意味での屋根がけである。従って、高温多雨のエリアであるアジアモンスーン気候の風土では、その気象条件的必然から生まれたと考えるのが妥当である。日本の場合は、それが結界としての意味も付加され、よく寺院や神社の入り口に架かるものが見られたりする。でも、ここまでの楼閣建築となると、やはりもと特別な意味合いがありそうだ。

事実ものの本によると、この風雨橋は、風水思想を背景とした造型であるらしい。主として風雨橋は、蛇行する川沿いにある村の上流と下流に立地し、「運気」を堰止めるダムのような意味合いがあるとのこと。橋を渡ると、内部は意外にガランドウで、楼閣の下には道教の神々がお祭りしてある。

基礎となる大きな杉の桁材は、樹齢八十年くらいのものを使用して筏状に組み上げ、橋全体を釘を一本も使わずに完成させる。トン族の誇りの建築である。彼らの同一生活圏でもある貴州省の貴陽という町が、雨が多く太陽が貴重だという地名であることが物語るように、この地域の杉の生長は早く、女の子が誕生すると杉を植え、嫁入りの際に婚家へ持たせる。ハテどこかで聞いたような、日本では桐の木を植え、嫁入り道具の箪笥を作る。

鼓楼の屋根飾り

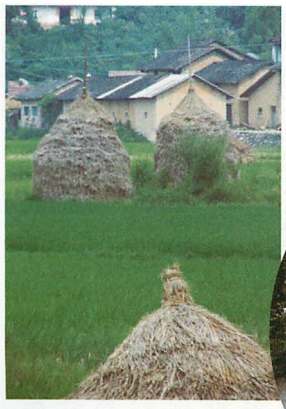
トン族のとある棟梁の家へお邪魔することが出来、いくつか質問すると、設計図無しで簡単な構造模型を作って、打ち合わせをしながら工事を進めるのだという。そうした技術の受け継ぎは、風雨橋だけでなくそれぞれの村の中心に必ずある「鼓楼」という建築にも如何なく発揮され、これまた素晴らしい造形美を見せている。これは、風雨橋の楼閣の一つを少し大きくさせて独立させたようなもので、集会所であり、客の接待所であり、祭りの場でもあるらしい。西欧の町が教会と広場を中心に発達したことの比較で考えると、そうした暮らしのコミュニティを知る上で東西の違いが興味深い。

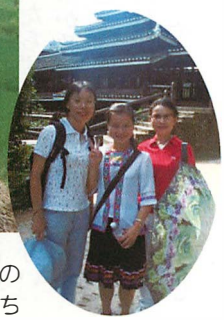
合龍橋

①程陽永済橋

また、私たちが各地の風雨橋を訪れて面白かったのは、どの橋でも夏の光景ならではの微笑ましいシーンにいくつも出くわした。ある橋では、男の子たちがそこから直接川に飛び込み水浴びをしていたり、老人たちや大人の男たちが涼を求めてたむろし、特別休みでも無さそうなのに将棋のようなものをしたりゆったりと談笑していたり。その中を小さな子たちが走り回って、ともかく時間がゆっくりと流れていた。女たちは殆どが家に居て、あまりブラブラしてなかったように見受けたが。

村人たちは、百年も、いやもっとそれ以上、そうしたスローペースで生活を続けてきたに違いない。金銭的には、上海や重慶のような超近代都市などと比べて、明らかに貧しそうではあったが、その心、精神性は実に豊かで大らかな人民の表情であった。今も、天真爛漫なこどもたちの笑顔が、風雨橋の風水意匠と重なって鮮明に記憶の中で蘇る。


中国のわらぐろ


ガイドはトン族の娘さんたち

研究員レポート

ハイジの国から学ぶ理念

研究員　兵頭　利樹

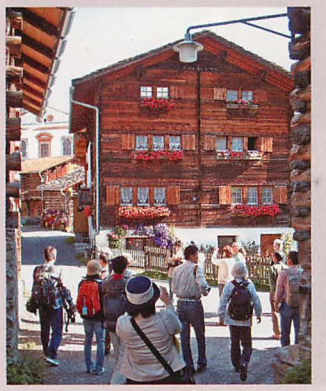
内子町の石畳地区は、現在進行中のまちづくり事例の中で最も注目すべきもののひとつだろう。地域の人たちが、その地域のためにお金を出し合い、知恵を出し合い、共に汗をかく。そんなサイクルが、過去から脈々と受け継がれてきた地域文化とむらなみの上に気負いなく存在する。その活動の一部は、別頁の安川徹氏の文に詳しいのでご参照いただきたい。

昨年の八月、『石畳を思う会』のメンバーが研修でスイスに行くというので、同僚の脇田と一緒にお願いして同行させてもらった。もちろんどこの補助も受けていない。彼らも我々も費用は自腹だ。当たり前のことだが、有志が身銭を切って、地域のために学ぶ。そこで見聞きし、考えたことを何回かに分けてリポートしたい。

『石畳を思う会』にとっては九年前に続いて二度目のスイスだったそうだ。石畳地区を流れる麓川では、時季になるとホタルが乱舞する。その川の補修には『近自然（多自然型）工法』が取り入れられ美しい堰が景観に魅力を添えているが、そこにはスイスで学んだ川づくりの理念が生かされている。

スイスは、環境のことを一生懸命やっている国だ。我々はかの地で、環境への負荷を徹底して低減しようと取り組むエコホテルに泊まり、『近自然学』の講義を聴いた。スイス人の講師山脇正俊氏は、『近自然学』研究家のほか多くのフィールドを持つ。彼の話す講義を、私は目からウロコが落ちる思いで聴いた。

スイスの美しさは偶然ではない。『近自然学』は、単に河川補修のテクニークの話ではなく、『人間の豊かさの持続』と『自然環境』との共存を目指す理念のことなのだと。



スイスでは、景観や音、匂いなどに対する法的な規制が厳しい。そうした『気持ちよさ』は共有財産であり、特定の人間が汚す権利などない、という考えが人々に根付いており、確かに、観光客とは無縁の過疎山村でも、家々の窓には花が飾られ、野原の草が刈り揃えられ、朽ち果てた家屋や廃棄物は見当たらず大変気持ちが好い。スイスの農業が政府の補助によって守られていることは有名な話だが、それでも経済的には決して豊かではないだろう。なのに、そこにある暮らしの美しいこと。

山脇氏は、そうした気持ちよさのことを『ランドシャフト』と呼んでいる。数値では測れないけれども直感的に感じる気持ちよさ＝『ランドシャフト』を開発の基準にしようというのが、『近自然学』のひとつの柱のようだ。

川も道路も街も、直感的に『気持ち好い』と感じるようにしていこう。それは、環境のために人間が豊かさの追求を諦めるのではなく、人間の豊かさを持続しながら、環境負荷を軽減することなのだ。いままでの常識を、一旦リセットしたところから始まる理念。それに基づく手法のいくつかを、次回紹介したい。

えひめ地域づくり研究会議　フォーラム2006

遺し伝える活動者の集い PART Ⅲ

えひめ地域づくり研究会議では、昨年に続き「遺すべきもの、伝えていくべきこと」をテーマに活動しています。今年度も愛媛県内で活躍する6つの遺し伝えるまちづくりグループが現況報告をします。県内のまちづくりに関わるみなさん、情報交換・ネットワークのづくりの場にしませんか？

活動者からの報告　13:40～

「愛媛の遺し伝える活動の現況は」

報告グループ

- ○ 今治コミュニティー放送株式会社（今治市）
- ○ 玉川町地域づくり研究会「源流」（今治市）
- ○ 平成船手組（松山市）
- ○ NPO法人 とべ・TOBE（砥部町）
- ○ 豊友会（大洲市）
- ○ 佐田岬裂織り保存会（伊方町）

基調講演　16:00～

「清里萌木の村の挑戦 ～文化をいかに地域に根付かせるか…～」

講師
舩木上次
開拓魂のカリスマ
萌木の村㈱代表取締役社長

70年前、ポール・ラッシュ博士が理想の農村として開拓した清里は、1980年代、急激なリゾート開発が進んだ。舩木氏は、手作り工房やオルゴール博物館等を集めた「萌木の村」の建設や、日本初の本格的な野外バレエ公演の開催等を通じて、清里に独自の文化を根付かせ、本物のホスピタリティと感動を与えられる観光地に復活させた。
近年は、八ヶ岳地域全体の広域観光に取り組み、舩木氏のフロンティア・スピリットは衰えることを知らない。

■とき　平成18年1月21（土）13時30分より
■ところ　にぎたつ会館　芙蓉の間
愛媛県松山市道後姫塚118-2　TEL 089-941-3939
■参加費　フォーラム…1,000円
交流会……5,000円（希望者）
■申込締切 1月13日(金)
■問い合わせ・申し込み先
（財）えひめ地域政策研究センター　まちづくり活動部門
TEL:089-932-7750 e-mail:uno@ecpr.or.jp
FAX:089-932-7760

TB トークバトル 平成17年度まちづくり地域課題研究サロン

地域の自立は経済の自立であるという視点に立ち、四国を代表する四人の地域アントレプレナーにスポットをあて、互いのぶつかりあいのなかで、地域資源産業の創出、起業家精神、ネットワーク形成など、地域が自立する道筋を模索する研究サロンを開催します。

「地域の自立とはなにか！」

四国を代表する4人の地域アントレプレナーが、馬路・上勝・双海・内子を総括する

馬路（高知県）東谷 望史氏
ゆず加工品の販売に中心的な役割を担い、村の情報をまるごと売り込み、馬路村ブランドを確立した。

上勝（徳島県）横石 知二氏
山の資源を活かした商品開発をすすめ、人口が少ないお年寄りの町で、「彩」という一大事業を立ち上げた。

双海（愛媛県）若松 進一氏
「夕日」という個性で地域を活性化。真似しない。真似できないアイデアで地域力をつくりあげる。

内子（愛媛県）森本 純一氏
直売所を支える情報システムの開発に取り組み、ITの活用で農業振興や地域おこしに成功。

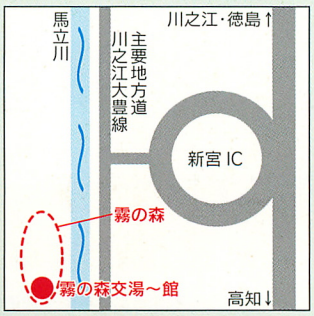
■とき　平成18年2月24日（金）10時30分より
■ところ　メルパルクMATSUYAMA
（郵便貯金会館）鳳凰・瑞雲の間　松山市道後姫塚123-2　TEL 089-945-6418
■問い合わせ　（財）えひめ地域政策研究センター　サロン支配人 清水和繁
申し込み先　TEL:089-932-7750　e-mail:shimizu@ecpr.or.jp
FAX:089-932-7760
参加には必ず事前の申し込みが必要です

●媛のくにフラッシュ●

『霧の森交湯～館』（四国中央市新宮町）

昨年８月に、四国中央市新宮町にオープンした「霧の森交湯～館」。温浴施設を完備する館内は、清流馬立川のせせらぎと緑豊かな自然が、憩いと癒しの空間を提供しています。温浴施設のほかに研修施設としても利用することができ、大小２つの研修室と郷土料理研修室を備えています。また、隣接のふれあい館で販売している「霧の森大福」は、お茶どころとして知られる新宮ならではの特産品として人気を集めています。

霧の森大福



《営業時間》8：30～21：00（浴室は10：00～21：00）
《定　休　日》毎週月曜日（祝日と重なる日はその翌日）
《問い合わせ》四国中央市観光交流課交流政策室　TEL 0896-28-6408

先日、帰省するために車を走らせていると国道沿いの至るところでイルミネーションを目にした。クリスマスが終わっても故郷に帰省する人を迎えるために、しばらくそのままにしておくそうだ。

イルミネーションに限らず、地域に植えられた花、行き交う人と交わす挨拶など、ほんの些細な心配りがそこを訪れる人の印象を左右する。もう一度訪れたいと思わせるまちには、地域の人の、そんな「迎える準備」をいくつも感じることが出来る。

（脇田）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

〒790-0003
松山市三番町四丁目十番地一
愛媛県三番町ビル二階
㈶えひめ地域政策研究センター
まちづくり活動部門
TEL089（932）7750
FAX089（932）7760

発行／平成十八年一月一日
㈶えひめ地域政策研究センター
印刷／岡田印刷株式会社

☆http://www.ecpr.or.jp　☆E-mail:info@ecpr.or.jp

本誌は、㈶愛媛県市町振興協会の委託を受けて発行しています。